

悠揚迫らぬ岩崎さん

橋本 侃

公には「岩崎先生」と呼ぶものの、「岩崎さん」のほうが親しみやすい。個人的には気の置けない心優しい人で、「真面目」の上に何かをつけたいくらい真面目で、誠実な人柄に皆は瞠目していますが、いったん言い出したら梃でも動かない頑固さを発揮することも確かで、半期制の導入などを決めた新カリキュラム作成には委員長として超凡人的手腕を発揮したと学科では評価されています。小生の入院加療の際には、役職上、休講・代講措置などで随分とお世話になりましたが、いかなる代案にも馬耳東風である、という噂が本当であることを実感しました。すでに腹に決めていると、動かざること岩のごとき岩崎権現ではありました。確かに、己に課した鉄則があるようで、その緻密さゆえに、入試の校正ミスなど皆無でした。

つい最近に定年となった伊藤克敏先生と小生は昭和四十八年に、岩崎さんはわれわれよりも一年遅れて、専任となりました。同窓生であることもあって、何かにつけて三人は意気投合し、教職員組合の旅行などもよく一緒にでかけたものです——そう、二人して面白い体験をしました。宴会がすんで、私服のまま、ほろ酔い加減で宿から外へ出かけた二人が、観光地に特有の客引きに出会いました。返事もしないで行き過ぎようとした

ら、その怪しい男が、我々の足元から頭の天辺まで視線を泳がせるようにして、「旦那……ですか？」と言ったのには驚きました。確かに、岩崎さんは六尺豊かですし、こちらでも大病前で柔道家然としていました。

そんな大きな人であるので余計に思い出深いことがあります。人文研の事務の方が辞めるのでお別れ会がありました。幹事が、「委員の先生方にも何か」と勧め、岩崎さんは十八番おはこの古里の民謡Ⅱ会津磐梯山を歌いだしました——すると、どうでしょう、隣にいたから見分けられたのですが、細かいステップを踏みながらの歌唱を始めたのです。スナックの狭い踊り場で盆踊りを始める趣向です。大きな人が膝から下だけで軽妙なステップを踏んだのですから、それこそ、「マザーグース」の世界です。同級生からの伝聞によると、悪友二人して下宿先を訪ねると、「岩崎のやつはいつも机にしがみついていた」のだそうです。きっとワーズワースと格闘していたのでしょう、大きな体を持って余しながら……。

ワーズワースと言えば、初見の頃、改まった挨拶代わりに、「ワーズワースは色盲だったそうですね？」とか、「桂冠詩人になったら一片の詩作もしていませんね？」などとぶつけてみましたが、古代中国の大人タイチンのように黙して語らずでした。門外漢には我関せず焉なのかも知れません。折があったら、今度は、「湖水地方が海拔千メートルもあったから頭脳が活発に動いて、ワーズワースにとって幸いしたんでしょうか？」と、同じ仲間の元非常勤のSさんから仕入れたネタをぶつけてみようなどと考えているところでした。ともあれ、岩崎さんとの思い出は、「後輩の癖にイジメてるだろう」と同級生で非常勤のIさんが二言目には言う軽口と共に、泰然自若とした大きな友がいなくなって寂しいなあ、という感慨に至ることでしょう。さようなら、岩崎さん！